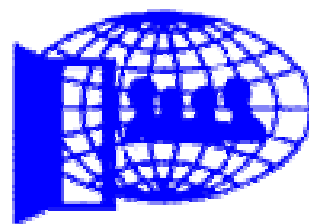




Servas Japan Tohoku

支部ニュース

No.74



● S.T. 支部長(新潟)	1
2010 年サーバス訪問報告	2
● T.N. さん, M.H. さん (福島市)	2
● N.O. さん (仙台市)	4
2010 年秋東アジア大会報告	6
● S.M. 事務局長 (仙台市)	6
編集後記	7

● S.T. 支部長(新潟)
初めて外国人を見たとき

初めて外国人を見たのはいつだったのだろうか。確か小学校入学前、アメリカ兵の乗ったジープが自宅近くの道路のカーブを曲がりきれず、横転したことがあった。そのとき現場に行って 2~3 人のアメリカ兵を見たのが私にとって最初の外国人だった。戦後 5~6 年頃である。田舎の日本海の近くに温泉があり、アメリカ軍がそこから上陸していた。上空にはB29らしき飛行機も飛んでいた頃である。戦後の日本の治安確認のためにアメリカ兵が我が家の近くを通ったのだろう。そのとき見たアメリカ兵は背が高く、ベレー帽をかぶり、とても格好よかったが、彼らはまさしく私にとっては「外国人」であった。何人かの子供が横転したジープの回りに集まって、じっと彼らを見ていた。私もその一人であった。彼らは何かをしゃべっていたが、その意味を知るよしもない。アメリカ兵の一人が子供にガムか何かをやりようとしたらその子は大泣きした。それ以後高校まで外国人に会ったことはなかった。中学で英語を習い始め、ラジオで英会話番組を聴いたが、今のように学校に外国人が教えることもなかった。高校の2年の3月に仙台のある大学が大学紹介に高校に来た。それが二度目の外国人との出会いであった。(このアメリカ人は宣教師で後年今いる職場であるアメリカ人女性非常勤を知るようになったが、その女性はなんと私が高校時代に会ったそのアメリカ人宣教師の娘さんであった！！)そのアメリカ人は大学のことを英語で説明してくれた。通訳がついていたので、英語がわからなくても大丈夫であったが、そのアメリカ人も「外国人」であった。大学を終えるまで私は 3 人のアメリカ人と 1 人のイギリス人教師の授業をとったが、彼らは皆「外国人」であった。学生の間に私はわずかな外国人にしか会っていない。しかも、その出会いにはいつも大きな壁があった。普通の、等身大の外国人とは遠い存在のいつも遠くから見ているだけの「外国人」であった。英語を話すアメリカ人やイギリス人をただ聞いているだけであった。

仙台で就職した年に私は初めて海外に行った。しかもそれはサーバス会員としてであった。夏であったために向こうの会員との連絡はうまくとれなかったが、それでもイタリアで 2 組のサーバス会員にお世話になった。今度は英語を話し、相手との会話を通して人間対人間関係を築くことができた。学生の頃までの外国人との接触はあくまでも距離をおいた接触で会った。しかしサーバスは違う。サーバスでは人間と人間の付き合いがあり、そこには相互の信頼感があった。そのような人間関係が生まれるともはや言葉は不要である。言葉がわかる、わからない問題は問題とならない。一人の人間が一人の人間に会うとそこにはもはや壁は存在しない。サー

バスのいいところは外国人が生身の外国人であるということである。普通の、あたりまえの外国人が目の前にいる。そこに人間の人間への理解が生まれてくる。その意味ではサーバスがわれわれに与えるメリットは大きい。何よりも「異人」同士が互いを理解しあえる場を共有できる。そういった相互理解があって世界が住みやすくなり、われわれは平和を享受できるのであろうと私は常々思っている。これは誰でもが知っていることである。しかしそれを実践するのはむずかしい。でもサーバスはその実践の第一歩をわれわれに提供している。私はそれを大事にしていきたいと思っている。

2010 年サーバス訪問報告

● T.N.さん、M.H.さん（福島市）

訪問国 オランダ、ドイツ、ベルギー（ホテル泊）

1. Ms. L. L. ;Amsterdam(オランダ)9 月 2 日～3 日
2. Ms. B. Z. ; Oldenburg(ドイツ)9 月 4 日～5 日
3. M. H (m), U. H (f) ;Dusseldorf (ドイツ)9 月 6 日～7 日

はじめに

訪問先 L L さんは支部ニュース No.73 に登場、T さん（盛岡市）と N（福島市）が受入れた方です。

私達はヨーロッパのサーバス訪問を考えておりましたが決断に至りませんでした。この 5 月、L さんの受入れを契機にその思いを強くし、L さん宅を起点とさせていただく形で B. Z. さん（再会）、H さん宅にお世話になりました。

交通手段にはユーレイルパス（ヨーロッパ鉄道パス）を利用しました。ユーレイルパスは、適用する国、乗車する日数等、条件により料金が異なります。オランダ、ドイツ、ベルギーの 3 ヶ国、乗車日数 5 日間、2 名のグループの条件で 24,300 円（1 人）でした。

航空券はインターネットで格安航空券を入手しました。正規の運賃より 4 万円程度安いかなと喜んでいました。ところが予期せぬ遠回り、成田⇒スキポールのはずが、成田⇒台北⇒バンコク⇒スキポールとなりトランジット・トランスファーの待ち時間も含むと片道 24 時間もかかりました。

L L さん宅訪問記

9/2 : スキポール空港⇒アムステルダム駅⇒ワーターロープレイン駅（路面電車の駅）。

L さんは地下鉄のワーターロープレイン駅に出迎えてくれ、両者すれ違いメロドラマ。

9/3 : 午後、運河クルーズ体験

船長が 10 歳前後の少年乗客に船の操縦：かじ取りを 20 分程度まかせる。

これにはびっくり。船長の度量の大きさをみた思い。

夕方、L さんは我々を市立図書館の 10 階にあるレストランに招待してくれた。

アムステルダムは起伏の無い街。街を見渡す絶景のポイントはこのレストランでした。

9/4 : 朝食後、ドイツへの乗換え駅まで送ってくれました。我々が知る由もない路線。40 分も近道になりました。

* 日蘭の架け橋

L さんは個人で旅行会社を経営。日本の旅館・民宿に興味を持ち、日本の JTB と提携、オランダ人を日本旅行へ送り出す。彼女の事業歴は 20 年以上。日本の観光庁は彼女を表彰すべきと思う。訪問当日は翌日のプレゼンテーションの準備で多忙でした。翌日のプレゼンテーションは 4 時間も立たったまま、オランダ人クライアントに日本の良さをアピールしたそうです。

私達はインターネットを利用して鉄道時刻の情報（列車番号・発車時刻・プラットホーム・乗換え列車番号）を取得し、行程計画を立てていました。帰国便に搭乗するための行程計画に、L さん「こんな時刻では帰国便に乗れないかも。このルートはしょっちゅう遅れを出すのよ」と言って自宅のパソコンを立ち上げ、会社のサーバーにアクセス、計画よりも早く出発する列車を探し出しプリントしてくれました。より早く出発する列車は L さんの予想どおり 30 分遅れました。おかげで無事帰国便に間に合いました。

Barbara Zill さん宅訪問記

9/4 夕：我々は予定時刻より1.5 時間遅れで Oldenburg 駅に着く。その間、彼女は度々駅に出迎えに車を走らせてくれていた。会って直ぐに駅構内のバーに案内され、コーヒーを頂いて疲れを癒す。彼女は顔が広いようでいたるところで声をかけられる。

家に到着、ベランダに出て風景を愛でる。コーヒー、アプリコット(パンの上にのせて)南瓜のスープ、ワインで歓迎された。

各部屋は彼女の好みの品々で装飾されています。Servas メンバーからの手紙、特に N からの手紙はその飾りの一躍を担っていたのには感激しました。

9/5 午前：Oldenburg の市内を案内してくれた。Oldenburg 市は歴史ある街。15 世紀に建てられたオルデンブルグ城。B さんの解説では近年の都市開発で城の床面は傾いているとか、各部屋を覗いていると水平感覚がおかしくなりました。

午後：ドイツと言えばアウトバーン。わざわざ 20 分ほど走って湖畔の古民家園へ案内してくれた。古民家は日本では曲屋。藁葺き屋根。家畜を冬の寒さから守るため。夕食は古民家園レストラン(屋外)で名物料理“うなぎの燻製まるごと一匹”。

9/6 朝：我々の乗る列車は 9:35 発。B さんの勤務時刻は 7:20 分。

彼女には先に出掛けてもらい、我々は戸締りをして 8:30 分に家を出た。



L さんの会社の飾りつけコーナーにて



Barbara さんの家

B さんの小学校

B さんは小学校の先生。10 歳児のクラス担任。「児童 30 名の中ドイツ人は 1~2 名。他はロシア、アフガン、イラク、ルーマニア、ハンガリー等々国際色豊かと言えば豊かだけれど紛争国難民の子供と経済格差難民がドイツに押しかけられているだけ。」だそうです。

続いて訪問した Dusseldorf の H さんも教員歴があり「ドイツの学校でドイツ語を話す生徒が皆無なんだ。」と嘆いていました。

H さん宅訪問記

9/6 午後：H さん宅へ駅から電話を入れた。奥さんが出て英語で道のりの説明受けたがチンプンカンプン。地元民ならともかく電話での道案内は無理。沿道の人々に住所を示し尋ねる。皆親切に教えてくれた。

お宅に着くとお茶に呼ばれた。庭の果樹の木陰で談笑。奥さんの Ulla さん環境汚染に関心あり。でも自宅の水道を信用せず飲まないとは過敏すぎる？

9/7 午前：N は、長男の嫁さん(南米コロンビアの首都ボゴタ出身)に簡単な指圧を披露。すると家族全員が興味を示し、U 奥さん、M 旦那さんにも施す。皆よろこんでくれた。

夜：夕食はMさんの手料理をいただく。

食後は彼と日独、米独、日本の基地問題、円高、国際情勢にまで話が及び意気投合。

ホームステイの楽しさ倍増。おかげで翌朝は駅まで車で送ってもらえた。

日本の縮図が世界の縮図

Hさん宅には長男夫婦が同居、3歳の孫娘がいました。長男は最近 Dusseldorf の日本企業をリストラに遭ったとのこと。再就職の仕事はみつからないそうで、日本の縮図をドイツで見たような気がしました。我々日本人には肩身の狭い雰囲気になされました。



Hさん宅にて

● N.O.さん（仙台市） 2010年八月 ヨーロッパ七カ国旅行報告 サーバス東北 N.O.

7月9日「旅への決意とホスト探し」

この旅の大きな目的は、これまで日本や海外で出会った大切な友人たちとの再会を果たすことと、ヨーロッパの教育現場を目にすることです。そのために、3週間でフランス→ベルギー→ドイツ→チェコ→フィンランド→スウェーデン→デンマークを巡ることにしました。ホスト探しでは、一番の目的である学校見学をさせてくれる方がなかなか見つからなかったのですが、フィンランドのあるメンバーが「自分も教員だがその時期は自分の学校の夏休みが明けないから、自分の妹が勤めている学校に行ってみてはどうか」とアドバイスをくれました。サーバスの方は文化交流の意識が高く、柔軟に対応をしてくださるのだと嬉しく感じました。



7月29日「フランス：ヨーロッパ上陸、でも遠いパリ・・・」

モスクワ経由の飛行機が、刻一刻と陸地に近付いていく、その窓からの夜景もまた美しく目を奪われました。フランスでは、十字の交差点ではなく、円形の道路の中心に向かってたくさんの道路が伸びているものがたくさんあります。そこに無数のライトがついているので、地上に星がちりばめられているようです。フランスは夜景もきれいなのかとうっとりして上陸したのも束の間、すぐに問題にぶつかりました。シャルル・ド・ゴール空港の入国審査は、フランス人用、EU 諸国人用、その他、と分けられており、私が通過したのは1時間経ってから。さらに中心街までの交通機関が突然ストップ。ありがたいことにその日のホストさんは「夜型だから大丈夫」と待っていてくれ、到着すると乾杯してくださいました。初めてサーバス会員として行動する責任感もあり心細くしておりましたが、大変温かく迎えてくれ感激しました。フランスではバケーションを5週間も取ることができるため、特に8月はフランス人がパリから出払っているということでホスト探しには骨を折りましたが、このような優しいホストさんに巡り合えたことに感謝しております。

7月30日「フランス：芸術の都・パリ」

ホストの J さんと近くのパン屋へ朝食を買いに行く途中、引越しに遭遇しました。パリでは建物が古く、エレベーターが小さすぎたり付いていなかったりするため、電動の梯子に荷物を設置して、外から窓に直接荷物を運び込むそうです。フランスの週末には欠かせないマルシェ(市場)では、食べ物以外にも洋服や工芸品も売っており見て飽きません。週末こそ稼ぎ時なのに、なぜお店を開けないのか疑問に思われますが、代わりにマルシェが市民にとっての大切な買い物の場所として発展したのがよく分かります。午前中は J さんの作曲した曲を弾き語りで聴かせてもらうことができ、とても楽しい時間を過ごすことができました。J さんのお仕事の関

係で、午後には家を出なくてはならなかったのですが、短い時間の中で丁寧に様々なことを教えてくださいました。

8月9日「フィンランド：人生の楽しみ方」

大学教授をされていたという S さんのお宅にお世話になりました。ゲストルームの壁には世界地図が張り巡らされ、どこに知り合いがいるか、どんな旅がしたいのか教えてくださいました。私も次回旅行するときには少なくとも日本地図を携帯して、私の地元を紹介しなくてはと思いました。彼は、リサイクル製品を作るのがお好きで、古いテニスラケットとスツールを組み合わせて背もたれつきの椅子などを作っていました。生活を楽しんでいる感覚が伝わってきて、フィンランドの好感がますます高まりました。



8月10日・11日「フィンランド：心のおもてなし」

この日は、「泊めることはできないけれど是非デイホストを」という方がいらっしゃり、ランチすることになりました。若いご夫婦でどちらも教員をされており、好奇心旺盛な大変素敵な方たちでした。教育者ということで、私の質問攻めにありました。また、日本に旅行したことがあるということで、当時の写真集やそのとき購入した日本人形を見せてくれながら、思い出話に花を咲かせました。ほんの二時間ほどでしたが、心の通い合いを心地よく感じました。

夜は、サーバス会員の妹さん M さんのお宅へ。旦那さんも先生をされており、日本の歴史や教育事情に興味を持ってくださっていました。また、このお家がなんとも素敵でした。近くで切ってきた木材を使って立てたという木のお家が、森の中に建っているのを想像してみてください。木のぬくもりと家族が大事にしてきたという想いが伝わってきました。さらに M さんと自宅のサウナに入り、リヒテで体を叩き合って健康そのもの。締めくくりは外に出て、釜戸で焼いたソーセージをビールと共にガブリ。フィンランド人の森と共生する姿に惚れ込んだ夜となったのでした。

翌日は、M さんの小学校見学です。恩返しとばかりに、小学5年生におりがみの手裏剣とコマの折り方を教えました。フィンランド人は、日本人に似て人見知りのところがあるとお聞きしましたがすぐになじんで、「ここはどうするの?」「できたよ～」とたくさん声をかけてくれました。



8月11日・12日「フィンランド：家族の一体感」

ヘルシンキから四時間半の電車旅でユバスキュラという北の都市へ。駅まで出迎えてくれた E さんは大学図書館の職員。到着した日は、近くの湖まで散歩に行きました。翌日は早速大学図書館を案内してくださり、ユバスキュラ大学の学生でも入れない書庫まで探検。さらに、わたしがフィンランドの教育に興味があるのだとメールで触れていたところ、E さんが自ら息子さんの中学校に連絡を取ってくださり、見学の許可をいただけてくださりました。日本のマンガ好きの息子さんとも次第に打ち解けることができ、この家族の素晴らしさを十分感じ取れました。

8月14日・15日「フィンランド：癒しの空間」

週末はヘルシンキから少し北に位置する小さな村へ。ご両親の職場は街中ですが、自宅は自然の中。パパは横たわったままこげる通勤用を買ったばかりの自転車がお気に入り。フィンランドの方は、引退したら森で自給自足をするのが夢だそうです。家の裏で取ったブルーベリーも大変おいしい。雌鳥も飼っていて、卵は自家製です。まさに自給自足の生活ですね。娘・息子とご両親二人でキューカンパーフェスティバルへ。その後、教会や歴史的建築物も見学し、最後は湖へ。湖で泳ぐのは初めてでしたが、娘と一緒に大きな岩からダイビングしてはしゃぎ、仲良しになりました。湖に浮かびながら「日本ではなんて忙



しかったのだろう」と思ったのです。

8月16日・17日「スウェーデン・サーバス・心の通い合い」
EさんとHさんは日本旅行の経験もあり、とても良くしてくださいました。お二人の古い友人も交え、四人でウプサラ大学や大聖堂を見学しました。手作りの寿司が好きで箸も使うそうなので、牛乳パックと和紙で作る箸置きを作りを教えました。帰国後も、日本料理パーティーで箸置きを使ったとメールをいただきました。お別れは寂しいですが、また会いに行きたいと思える素敵なご夫婦とお友達でした。



2010年秋東アジア大会報告

● S.M.事務局長（仙台市）

第6回サーバス東アジア会議に参加して

「東アジア会議」

11/5日 10 末に開港された羽田空港を利用して台北に行きました。新しく改装された羽田国際空港は東京駅からのアクセスが便利で、空港内の規模も小さいので迷うことなく3時間の快適な旅ができました。

「台北松山[ソンサン]空港」に降りて目に飛び込んでくるのが、知っている漢字、初めて見る漢字、どこもかしこも漢字の洪水です。私には台湾人の友人がいますので「やっと高村さん(帰化して日本の苗字)の国に来たのだ」と高揚した気持ちになりました。

会議場に到着すると懐かしい人たちが迎えに出て来てくれ、病氣入院中の母の主治医から励まされてこの会議に来れたことを改めて感謝しました。夜の歓迎会は次から次と美味しい中華料理がでてきて食べることに話すことの何とも忙しかったこと。若き台湾サーバス会員の活躍に会場は盛り上がりとても華やぐものでした。

次の日午前9時からの会議、参加者39名の台湾会員のほとんどが20代、30代、40代と若い人たちだったのには圧倒されました。2006年までは会員が10名にもならず、会員増すために台湾NS Serenaさんは長い間苦労してきたのです。

少しずつ会員が増えていったのは旅行会社に働くMさんがサーバスのことを書いた本を出版し、さらにテレビに出演したこともあって、会員が100人近くまで増えたそうです。羨ましい話ですね。今回の会議もSさんのお母さんの急病、その後間もなくお亡くなりになるというハプニングがあり、Mさんが替って会議の責任者となり取り仕切ってくれました。若く聡明なMeiさんの働きは会議中も遺憾なく発揮されていたと思います。

「風光明媚な台湾観光」

旅行会社の働くMさんの企画で会議後、格安観光旅行(二泊三日3食付き、入場料付き、ガイド付き 21,000円)が用意されていました。韓国人11名と日本人4名だけの参加でした。

私は台湾に原住民が14族もあることも調べずに台湾に来てしまいまし



たが、熟練ガイドの丁寧な説明は分かりやすいものでした。小型バスで台北の街を離れて間もなく山と溪谷が目の前にそびえ立ち、軽装の用意しかしてない私は寒さと終始闘うことになりました。山肌を縫う道は狭く、蒋介石が中国本土から逃げてきたときに、迷路になって逃げ通せたという説明も頷けるほどの険しい道が続き恐怖をしばしば感じました。台湾には三千メートルを超える山岳が二百余りあることも当日知ることになり、親切的なガイドの厚地のジャンパーを借りて寒さを凌ぎました。「おんぶに抱っこ」過ぎる反省の旅でしたが、大きなハプニングもなく素晴らしい体験をすることができました。

「有意義だったホームステイ」

11/9 日一泊でしたが、ホームステイの体験がありました。私の家族は子ども3人の若い夫婦のお宅でした。中国名 RT、A Y と、二つの名前を持っていました。台北での会議中、お互い呼び合うとき「S. L S」と英語の名前を使っていました。その理由を尋ねても「ニックネームですよ」と異口同音に答えが返ってくるのですが、その答えは私の好奇心が満足するものではありませんでした。ご主人の蔡明哲の名刺にはもう一つの名前 R T が印刷されていましたから、二つの名前を持つことはもっと深く台湾の社会に根ざしていると思います。

R と A には8歳の双子のお嬢さんと3歳の女の子がいました。いつもは夜9時に寝る子供たちも今日は遅くまで起きていて良いとお許しが出たようです。新会員のご夫婦にとって、私が最初のサーバス・トラベラーということで、私の方も気合いを入れて楽しい時間を作る努力をしました。

小3の漢字書き取りの宿題をしている T と M にそれぞれノートを見せてもらおうと戦前日本でも使われていた旧漢字がずらっと並んでいたのです。台湾では「ひらがなもカタカナ」もないのだから当たり前のことですが、大変なエネルギーを使って覚えるに違いありません。たとへば、学一學、台湾一臺灣と書きます。

ご両親は私の仰天することが全く分からず、不思議そうな顔をしていました。それほど私にとっては子供たちが難しい漢字を勉強していたのです。いつも感じるのですがサーバス・トラベラーとしてホームステイの機会は感動の連続を与えてくれるものです。

以上

編集後記

投稿してくださった皆さん、ありがとうございました。なお、投稿される時、掲載する写真の容量をできるだけ小さくしていただくようお願いしておりますが、もし、やり方がわからない場合は、こちらで小さくすることもできます。ただし、その場合、写真は文書に入れ込まずに別のファイルとして添付して送信してくださいますようお願いいたします。入れ込んでしまいますと、こちらで写真の編集ができなくなりますので、ご注意ください。また、もし今回の支部ニュースに記載されなかった記事を見つけた場合や、お気づきの点がありましたら、お知らせください。年末も押し迫り、慌しい季節となりました。良いお年をお迎えください。来年も皆さんにとってよい年になりますように。今後とも、よりよい支部ニュースを発行よう頑張りますので、来年もどうぞよろしくお願いいたします。

M.O.

